

たった一つの命だから

喜多方市立高郷中学校 三年 佐藤 心彩

「すぐによくなって帰ってくるよ。」その時の私は軽く考えていました。

去年のある日、私の曾祖母が家で突然倒れ、救急車で運ばれました。後になってから、「あと一、二分遅かったら助からなかったかもしれない」と聞かされ、その言葉を聞いた瞬間、背筋が凍りました。昨日まで普通に話していた人が、今日いなくなるかもしれない。当たり前に過ごしている毎日は、本当はとももろく、いつ失われてもおかしくないものなのだと気づきました。曾祖母が助かってくれたことは、私にとって大きな奇跡でした。

この出来事をきっかけに、私は自分が生まれたときのことについても考えるようになりました。

私は、低出生体重児として生まれました。低出生体重児とは、生まれたときの体重が二五〇〇グラム未満の赤ちゃんのことです。私は一ヶ月ほど早く、一九二〇グラムで生まれました。母が妊娠三十週で妊娠高血圧症になり、母子ともに命の危険がある状態だったからです。

生まれたばかりの私は、産声も小さく、新生児集中治療室の中で一週間ほど全身がチューブにつながれていました。母は、私が元気に育つのか、不安でいっぱいだったそうです。先に退院した母は、毎日病院へ母乳を届けに通っていました。小さな命が無事に育つのか分からない中、どれほど心配だったことでしょう。そのとき母がどんな思いでいたのか、私には想像することしかできません。しかし、自分がその立場だったらと思うと、胸がいっぱいになります。

もし、あの小さな命が助からなかったら、私は今ここで話していません。友達と笑い合うことも、家族と食卓を囲むことも、将来の夢を語ることもできませんでした。そう考えると、私が今生きていることは「当たり前」ではなく、たくさんの人の支えと「奇跡」が重なった結果なのだと思います。

だからこそ、私は学校で何気なく聞こえてくる「死ね」等の言葉を聞かされた時に、胸が苦しくなります。その言葉の先にも、私と同じように、お母さんが命がけで産んでくれた、かけがえのない命があります。その命の重さを、たった一言で否定するような言葉を、軽い気持ちで使ってはいけないと思います。

私たちは、明日も今日と同じように過ごすことができと思っています。でも、それを誰も約束することはできません。だからこそ、私は一日一日を大切にしたいと思います。そして、自分の命だけでなく、家族や友達、一緒に過ごしている周りの人の命も大切にしたいと思います。

今日笑えたこと。誰かと話せたこと。「おはよう」と言えたこと。「ただいま」と言えたこと。その一つ一つは、本当は奇跡なのです。世界の中には、幼くして命を落とす子ども、病気で長く生きられない人、戦争で命を落としてしまう人がいます。病気や災害、戦争によって、今この瞬間も多くの尊い命が失われているのです。

だからこそ私は、「死ね」ではなく、「ありがとう」を伝えられる人になりたいと思います。命は、一つしかありません。「ありがとう」が自分の命と、そして目の前にいる誰かの命を大切にできる言葉だと思うから。